

さざなみ : **滋賀医科大学附属図書館報** No.40
(1997.2)

発行年	1997-02
URL	http://hdl.handle.net/10422/1150



滋賀医科大学附属図書館報

No.40

目 次

1997年 2月

研究と情報今昔	小児科学講座教授 島田 司巳	2
シリーズ 本との出会い(5)	生理学第二講座教授 北里 宏	4
ホームページを開設しました	図書課総務係	5
新着図書紹介	図書課情報管理係	6
医の倫理に関する図書		
附属図書館の活動		7
本学関係者寄贈図書		8

研究と情報今昔

小児科学講座教授 島田 司 巳

現在のわが国は豊食を通り過ぎて飽食の時代にある。随分以前のことになるが、何かの学内会報に第3内科前教授の繁田先生（現名誉教授）が興味あるエッセイを載せておられた。ご記憶の方も多いと思う。記憶違いや表現の拙劣さの故に先生の名文を汚す恐れはあるが、あえて要約すると、“今の日本は臍臓受難の時代にある。何10万年の人間の歴史は常に餓えとの闘いであり、代謝の機構は如何に血糖を上げるかであった。ところが、このわずか20～30年の間に、人類が経験したことのない突然の豊食時代の訪れに、臍臓は日に夜をついで血糖調節に苦闘を強いられている”といわれている。

情報についても同じことがいえるのではないか。世界中の最新の研究成果の要約にも、パソコンで学内LANにアクセスすれば、本学でも自室に居ながら目を通すことが可能である。しかし、キーワードを選んで検索しても、当然のことではあるが、玉石混淆の論文が連なってくる。あれもこれもと欲に駆られ、取捨選択が大変である。私の専門分野である小児神経学でも、Child Neuroという国際ネットワークサービスがあり、毎朝登校してノートパソコンを開くと10件前後の情報が届いている。始めは、物珍しさで逐一目を通していたが、今では飽食気味になってきた。私の場合、古びた脳が大変な受難に陥っている。

ところで、パソコンに凝っている人の中には、研究があまり進捗しない者が多いように見受けられるが、古脳者の偏見であろうか。研究データなしにパソコンに向かっても意味がない。インターネットで世界の最新情報に精通しても、自身の手と足で得た研究データがなければ独創的な論文が生まれるはずがない。研究の初心者か、インターネットで世界の最新研究情報を収集し過ぎるのはいかなものか、と私は考えている。自分が研究しようとするテーマが如何に進捗し、やり尽くされているかを思い知らされ、意欲を削がれることが多いからである。

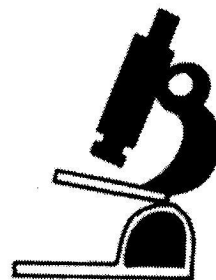
昔を懐かしむのは老いの表われといわれるが、足で情報を集め、情報に押し潰されることなく研究できた昔が私には懐かしい。私事になるが、私が大学院に入学したのは1962年である。大学院生といえども1年間の関連病院出張があり、研究は2年目からである。私は主科目分担という制度に則って、先ず病理学講座にお世話になり、H³-チミジン・オートラジオグラフィーを習得し、マウスの脳の神経細胞発生と分化の研究に取り組んだ。指導していただいたのは藤田哲也講師（後に京府医大教授、同大学長）であった。当時、先生は卒後6～7年の若手研究者であったが、すでに年間数編の論文を一流の欧文誌に投稿され、それらに対する別刷請求が小さな机に山積みされていた。今では珍しいこととはいえないが、当時の私には大変な驚きであった。

その先生から、研究の心得として、あまり先々文献を読まず、先ず実験をするように、との助言をいただいた。実験の基礎訓練中のある日、試作した子マウスのオートラジオグラフ標本が首尾よく出来上がり、顕微鏡を覗くと、小脳皮質の表面に多数の標識細胞が局在しているのが目に飛び込んだ。まさに目に飛び込んだのである。この時の感動は今も忘れがたい。これは大発見ではないかと、興奮したその新(?)知見を報告すると、先生はおもむろに論文別刷を取出し、このSidman(別刷の主)の結果を確認したな、とニッコリされる。私としては、この文献を先に読ませてもらってれば、無駄骨をおることもなかった、とその時はいささか落胆した。しかし、それにもまして研究の面白さを学び、意欲が湧いてきた。もし、先々文献を読み漁っていたら、おそらく先人の知見に圧倒され、技術の習得にも身が入らず、また感動をもって標本を観察するとか、自分なりに所見を解釈・推理する習慣等は身につかなかったであろう。駆出しの頃に藤田先生からいただいたあの一言を一部改変して、今では「過剰な情報に振り回されず、先ず研究」を座右の銘の一つにしている。

何年か一つの研究テーマを掘り下げていくうち、誰しも、同じ分野における国内外の研究者や競争相手が絞られてくるようになるものである。私の場合、それは先の論文の主であるSidmanを始めAltman, Rakic, Caviness, Evrardといった連中であつた。何れも、競争できる相手ではないが、せめてこの連中に認めてもらいたいという思いだけは次第に醸成された。彼らの論文が気懸かりで、入庫の遅い京府医大のCurrent Contentsを待ち切れず、毎月1回京大医学部図書館に出向いて最新情報を探ったものである。

念願かなって、彼らの内の前3氏には学会等で何度かお目にかかることができた。またハーバードのCavinessとルーベンのEvrardとは20年余におよぶ交流が続き、遂に一昨年は、私が会長として大津で開催した日本小児神経学会・国際発達障害シンポジウムの合同会議にこの2人を招待講演者としてお招きし、さらに友情を深めることができた。彼らとの個人的情報交換も、今ではE-mailへと発展しており、パソコン嫌いの私も時代の波には逆らえないことを悟りつつある。とはいえ、わくわくしながら新着のCurrent Contentsから情報を得たころの郷愁はどうも消えそうにない。

(しまだ もりみ)



シリーズ

本との出会い(5)

生理学第2講座

教授 北 里 宏

私が学生生活を送っていた昭和20年代の終わ
りから昭和30年代の前半にかけてはもはや戦後
ではないと言われ始めた時代であった。戦後の
混乱が落ちつき、ある程度生活にゆとりが出来
ると共に、戦前の生活スタイルが一挙に復活し
た。正月には華やかな晴れ着が見られるよう
になり、街では背広にソフト帽といった姿も見
られるようになった。とは言ってもまだ極めて貧
しい状態であった。講座の研究費が少ないので、
講義の資料としてプリントが配られることは殆
どなかった。その代わりに講義をされる先生方
は黒板を使って丁寧に説明して下さった。時間
は今より遙かにゆっくりと流れていた。研究費
が乏しいことから、当時紙と鉛筆を用いる研究
が盛んであった。また原子物理学の急激な進歩、
湯川教授のノーベル物理学賞授与は若者の心を
理論物理学の方向へ強い力をもって引きつけて
いた。紙と鉛筆で、アメリカ程の金と物がなく
ても、もしかすると世界に認められる様な仕事
をすることが出来るのではないかの期待があ
った。丁度その頃、私が学んでいた大学の生理
学教授である吉村寿人先生はロックフェラー奨
学金を得てハーバード大学のA. K. Solomon教
授のもとへ1年間留学されることになった。そ
の結果、私たちの学年は生理学講義の大部分を
京都大学の太谷卓造教授から受けることにな
った。太谷教授は物静かな考え深い先生であ
った。私は今でもこの先生から講義を受けたこ
とを非常に幸せに思っている。幾分暗い講義室
の教壇の上を歩きながら、うつむき加減に一
言一言よく考えられ、明確な言葉を選び、し
かも淀みなく講義された。活動電位が局所電
流をとまって伝導していくことはよく理解で
きた。しかし、明晰な講義にもかかわらず、ど
うして局所電流が発生するかは分からなかつ
た。臨床各科の講義が始まった夏、心電図室
の仁木偉瑛夫先生の

ところに入出入りすることが許され、喜び勇
んで臨床所見と心電図の変化との関係を懸命
に調べ始めた。この仕事は臨床医学に初めて
触れる若者を熱中させるのに十分なものであ
った。この頃はまだ洋書も非常に高い時代で
、神戸のOsker-Rothackerと言うドイツ書店
から明石さんという方が月に1度程の割合で
ドイツの医学書をかかえて持ってきてくれて
いた。仁木先生の勧めでRothmannのElektro
kardiographieを買ったときの喜びは忘れら
れない。それは緑色の表紙の本だった。心筋
から導出される電気現象を電氣的2重層の移
動で説明してあった。病的所見の説明にはこ
れで十分であったが、どうして電氣的2重層
が移動するかはやはり分からなかった。仁木
先生はそこでA. von MuraltのNeue Ergeb
nisse der Nervenphysiologie (Springer-Ver
lag, 1958)を与えて下さった。この本で私
は1952年にJ. Physiologyに発表されたHodg
kinおよびHuxleyの一連のしごとを初めて
知った。しかし、この本を通じての活動電位
伝導に関する私の理解は不十分なものであ
った。

卒業し、1年間のインターンを終えたあと、
仁木先生の勧めで仁木先生の研究室に入るこ
とになった。その後、仁木先生の推薦で第2生
理学教室助手に採用されたとき、あらためて
HodgkinおよびHuxleyの論文を精読した。イ
オンチャネルの開閉の機構に関する研究は
Hodgkin-Huxleyによってほぼ完全に方向付
けられていることを知った。しかし、1つの
チャネルを通して流れるイオン電流の電圧-
電流曲線に関してはまだ問題が残っていた。
Hodgkin-Katzの方式では、細胞内外のイ
オン濃度が決まれば、膜を貫くイオン電流-
電圧曲線はただ1本だけである。しかし、実
際の細胞膜では細胞の種類および測定条件
の変化に従って様々である。このことはイ
オンチャネルの性質を表すのにHodgkin-
Katz式は不十分であることを示している。
ときはまさに我が国における生物物理化学
の勃興期であった。この時期に、Johnson,
Eyring & PollissarのThe Kinetic Basis of
Molecular Biology (John Wiley & Sons, Inc.,
New York, London, 1954)に出会った。この
本の中ではイオンの動きはバリアーを越える頻

度をもって取り扱われている。Eyringの拡散に関する絶対反応速度論との出会いは私に決定的な影響を残した。その後、もっと生物学的な現象について研究を進める傍ら、現在に至るまでチャンネルの中でのイオンの粒子的な動きについて考え続けている。今まで考え続けても、まだ完全に満足できる解答は得られていないが、少なくとも膜β細胞の内向き整流性を保つATP感受性チャンネルの中のイオンとporeのイメージは次第に明確な物に成長し続けている。この種の仕事は大学を去った後でも、紙と鉛筆とそれに計算機、それも余り新しいものでなくてもいい、があれば、続けることが出来るであろう。学生の時代からトゲの様に心の奥底に引っかか

っていた問題を大学生生活も終わりに近い頃になってやっと解くことが出来たそのきっかけを与えてくれたこの本との出会いは私は密かに天からの贈り物であると思っている。

情報検索の手段が発達した現在でも、ほんとうにその人にとって価値のある本との出会いは全く偶然のなせる技であると思う。ところで、求めているとき、それに出会っても、それが価値のあるものと気がつくこともない。一生懸命に考えているとき、はじめて価値のあるものに出会う。求めているものに出会う機会は多ければ多い程よい。幸せはこの出会いの数に比例するようである。

(きたさと ひろし)

お知らせ ホームページを開設しました



附属図書館のホームページを平成8年12月に開設しました。

利用案内、新着資料案内、オンライン・ジャーナルのリンク集などを用意して、皆様の来館をお待ちしています。

今回はホームページのメニューのなかから特徴のあるものをご紹介します。

1. WWW館内ツアー

豊富なイメージを使って、図書館利用の基礎

から応用までをご案内しています。

1階玄関からスタートし、2階の集密書架まで到達するころには、図書館を今まで以上に便利に、そして、快適に使っていただけるようになると思います。

2. Online Journal

近年インターネットで利用できる学術雑誌が増えています。本文へのアクセスは有料ですが、目次までなら無料で利用できるものが多いようです。冊子の到着よりもかなり早い時点で最新号の内容を確認することができます。

ここでは附属図書館のスタッフが厳選したコアジャーナルへのリンクが集められています。タイトルのアルファベット順、出版社・学会別のメニューを用意してありますので、ご利用ください。

3. 医学古書常設展示

当館所蔵の医学古書コレクション（河村文庫、守一堂文庫）の一部を電子展示しています。

オリジナルの資料は附属図書館1階で常設展示していますので、あわせてご覧になってください。

この他にも図書館に関する最新の情報をお知らせするメニューが用意されていますので、ぜひアクセスしてみてください。

附属図書館のホームページには、滋賀医科大学のホームページから「滋賀医大ネットワークサーバへ」→「講座・附属施設等」とリンクをたどるか、下記のURLを指定することでアクセスできます。

<http://www.shiga-med.ac.jp/library/>

新着図書紹介

医の倫理に関する図書

図書館では、教養図書として日本の文学賞の受賞者作品、美術書、視聴覚資料、岩波文庫などを購入してきました。

今回は、最近出版された医の倫理に関する図書を集めてみました。医療関係者の著作だけではなく、文学者、仏教関係者、ノンフィクション作家らの著作もあり、立場の異なる視点で考えることもできるかもしれません。主なものを挙げておきます。

医療原論 医の人間学

竹内正〔監修〕 大井玄・堀原一・村上陽一郎〔編〕 弘文堂 1996

バイオエシックスとは何か

加藤尚武 未来社 1986

最後まで人間らしく 患者の自己決定権について

ユーリウス・ハッケタール 未来社 1996

命のプリズム 医療ルネサンスpart VI

読売新聞社 健康・医療問題取材班編

読売新聞社 1995

安楽死 生と死をみつめる

NHK人体プロジェクト編著 NHK出版 1996

「死の医学」への日記

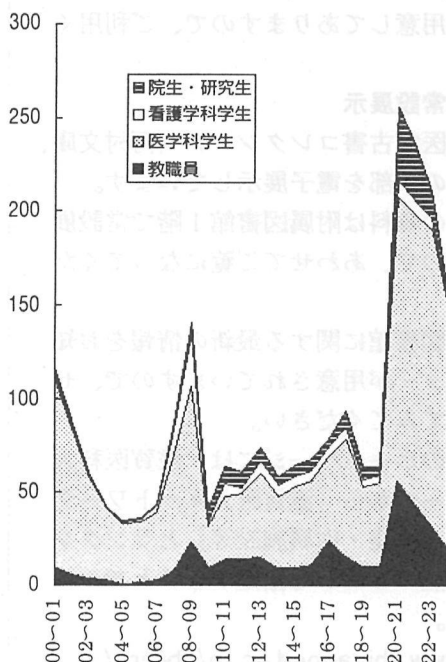
柳田邦男 新潮社 1996

このほかにもありますので、どしどしご利用ください。

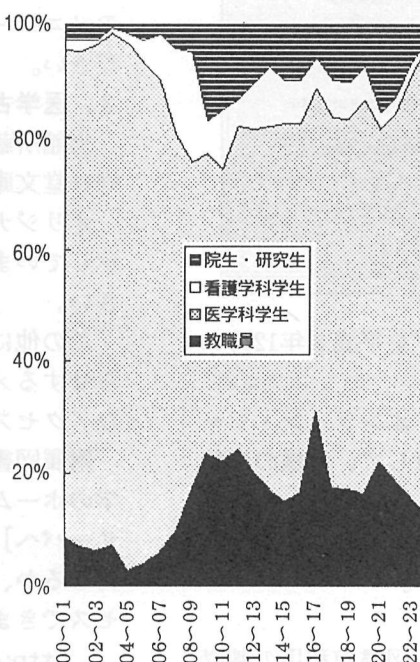


24時間開館の利用統計

月間時間帯別利用者数(平成8年7月～12月の平均)



月間時間帯別入館者割合(平成8年7月～12月の平均)



このグラフからみると、図書館利用のピークは、午前9時頃・正午頃・午後5時頃・午後9時頃となっており、中でも無人開館となる午後8時以降の入館者数が全体の38%となっている。また、時間外(午後8時から午前9時)の利用者は全体の68%もあり、この数字からみると、無人開館は有効に機能しているといえます。

◆ 附属図書館の活動 ◆

(平成8年7月～平成8年12月)

利用者向けオリエンテーション

大学説明会の施設案内

平成8年8月27日(火) 15:00～16:00

附属図書館一階の見学 (約120名)

看護部研修

平成8年8月28日(水) 13:30～14:30

館内案内と医学中央雑誌(冊子体、CD-ROM)の説明 (約20名)

滋賀県看護協会の看護研修

平成8年8月30日(金)

一日図書館を利用してもらった。(約50名)

- ・館内案内と県内医療機関従事者に対する図書館サービスの説明
- ・医学中央雑誌(冊子体)の説明

医学文献の調べ方に関するガイダンス

平成8年9月11日及び25日

出席学生数 35名 (4%)

附属図書館刊行物

さざなみ No.39 (平成8年8月)

附属図書館要覧 (平成8年11月)

附属図書館のイメージがサット頭に入るよう、ほとんどが写真と図だけです。以後隔年ごとに発行の予定です。

附属図書館委員会関係

第77回 平成8年7月11日

- ・議事録の取扱について
- ・将来構想検討委員会(仮称)の設置について
- ・「図書館要覧(仮称)」「案」の作成について
- ・「研究業績集(仮称)」の作成について

第78回 平成8年10月3日

- ・平成8年度図書館資料費について

第79回 平成8年11月25日

- ・マルチメディアセンター構想にともなう附属図書館の位置付けについて
- ・講座所蔵の不用雑誌の取扱いについて
- ・年末・年始の図書館の開館について

附属図書館将来構想検討専門委員会

第1回 平成8年10月29日

第2回 平成8年12月24日

- ・附属図書館の将来構想について

図書館関係会議

第3回国立医科大学図書課長事務連絡会議(横浜)

第21回国立医科大学図書館会議(横浜)

平成8年7月2日

第43回国立大学図書館協議会総会(横浜)

平成8年7月3日～4日

図書館情報システム特別委員会

ILLシステム専門委員会

第1回 平成8年7月16日(大阪大学)

第2回 平成8年10月2日(大阪大学)

第3回 平成8年12月5日(大阪大学)

日本医学図書館関係

第67回近畿地区医学図書館協議会例会

平成8年10月4日(大阪大学)

日本医学図書館協会企画・調査委員会

平成8年8月30日(奈良県立医科大学)

平成8年10月25日(滋賀医科大学)

平成8年12月13日(京都府立医科大学)

近畿地区医学図書館協議会シンポジウム実行委員会

平成8年8月30日(近畿大学)

平成8年10月23日(近畿大学)

研 修 関 係

平成8年度大学図書館職員長期研修

平成8年7月17日～8月2日(東京)

平成8年度図書館等職員著作権実務講習会

平成8年8月27日～30日(九州大学)

平成8年度国立学校事務電算化講習会

平成8年9月18日～20日(京都大学)

インターネット関連データベースセミナー

平成8年9月27日(大阪)

平成8年度近畿地区国立学校等係長研修

平成8年10月21日～24日(京都)

第9回国立大学図書館協議会シンポジウム

平成8年11月27日～28日(名古屋大学)

近畿地区医学図書館協議会シンポジウム

平成8年11月29日(大阪市大)

学術情報センターシンポジウム

平成8年12月12日(大阪府立中央図書館)

大阪大学附属図書館職員研修会

平成8年12月16日(大阪大学)

1月末に学部学生の皆さんに図書館についてのアンケートをお願いしております。集計結果については、次号No.41でお知らせする予定です。

本学関係者寄贈図書

小玉正智 (外科学第一講座・教授)

来見良誠 (第一外科)

Q & A 腹腔鏡下胆嚢摘出術

こんな時どうする?

医学書院 1996

予防医学講座

教職員の健康実態調査報告書

1995

高橋三郎 (名誉教授)

染矢俊幸 (保健管理センター・講師)

DSM-IV ケースブック

創造出版 1996

第22回若鮎祭実行委員会メイン企画局

(シンポジウム「みんなで考えるターミナル
ケア」講演関係者著作物)

素顔の医者

中川米造 講談社 1993

医学の不確実性

中川米造 日本評論社 1996

人間らしく死ぬということ ホスピス医療の
現場から

山形謙二 海竜社 1996

生命倫理と医療 すこやかな生とやすらかな
死

星野一正 丸善 1994

死の尊厳 日米の生命倫理

星野一正 思文閣出版 1995

いのち ありがとう

福岡啓介 風の碑社 1994

ご惠贈ありがとうございます。図書館の蔵書として広く利用に供させていただきます。

附属図書館委員会委員

平成8年2月1日現在
(任期)

委員長	半田教授 (脳神経外科学講座)	8.4.1~10.3.31
委員	辻 助教授 (歴史学)	7.10.28~9.10.27
委員	安藤教授 (化学)	8.10.8~10.10.7
委員	堀池教授 (生化学第一講座)	7.10.28~9.10.27
委員	陣内教授 (生理学第一講座)	8.10.8~10.10.7
委員	西 教授 (法医学講座)	8.10.8~10.10.7
委員	木之下教授 (内科学第一講座)	7.10.28~9.10.27
委員	上原教授 (皮膚科学講座)	8.10.8~10.10.7
委員	山路教授 (薬剤部)	7.10.28~9.10.27
委員	上岡助教授 (臨床看護学講座)	7.10.28~9.10.27

表紙の写真について

No.40から本学職員西村春雄さんの作品「魩」
を表紙に採用させていただきました。

魩とは、魚をとる仕掛けのことで平凡社大百
科辞典には次のように記されています。

えり 魩

岸に沿って回遊する魚が〈ハリズ〉という竹
の障壁にぶつかって誘導され、沖の側に設けた
狭い〈つぼ〉という部分に入りこむことになる
ので魚偏に〈入る〉という国字が作られた。日
本では琵琶湖のものが有名。

滋賀医科大学附属図書館報「さざなみ」No.40

1997年2月発行

編集・発行 滋賀医科大学附属図書館 〒520-21 大津市瀬田月輪町

TEL.0775-48-2077 FAX.0775-43-9236